View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

# メキシコで貧しく，女性であること
## ── テレビドラマと女性殺し ──

Ser pobre, mexicana y mujer

梅　本　英　二
Eiji UMEMOTO

Femicide あるいはfeminicideという言葉は，殺人事件で女性が被害者である場合，マスコミで慣用的に使われていた用語であったが，男女の間に存在する不均衡な力関係が様々な学問の分野で注目されるようになった1990年代に，「女性が女性であるという理由だけで被害者となる殺人」と定義付けされる(Russell & Radford 1992)。しかしこうした犯罪を取り巻く社会状況に，より深く分析が加えられるようになり，この言葉の新たな定義の必要性が再び認識され始める。例えば，女性が自らのパートナーによって暴力をふるわれた場合，それはすべての社会で必ずしも犯罪として成立するわけではない。また，性的暴行や殺人等，より深刻な暴力行為の場合でも，犯人が特定されなかったり，逮捕されても証拠不十分で放免されるというケースが多数報告されている。その背景には，政府，警察，裁判所といった，犯罪を未然に防ぎ市民の安全を保障し，また発生した場合には犯罪者を拘束し処罰する役割を担う機関とそれら行政司法に関わる制度が正常に機能していないという状況がある。それに加え，女性に対する暴力を容認するような，一般の人々の間に存在する偏った認識がその原因となっていることも指摘されている[1)]。こうした現実を踏まえて新たに提唱されているのが次のような定義である。femicide/feminicideとは「ジェンダー間の力関係に根源を持つ，被害者が女性である殺人」で，「国やその機関の直接的あるいは間接的な関与と個々の犯罪者とによって行われる，ジェンダー関係を基盤とした暴力によって引き起こされる」犯罪であり，また「社会的，政治的，経済的，文化的な不平等に由来する社会全体に蔓延する暴力」である（Fregoso and Bejarano 2010:5)。

この小論では，上記の定義で言及されている，femicide/feminicideの要因とされる社会的，文化的な不平等がどのような形でマスメディアを通じて発信されているかについて考察する。まず，女性殺人が多数報告されているメキシコ，フアレス市における事例に関して，この国境都市が置かれている政治社会的文脈を概観し，次にこうした事件をめぐる新聞報道の言説と，近年メキシコで制作されたテレビドラマの語り口を分析する。そうす

1）ラテンアメリカ各地における事態の深刻さを示す資料としては，メキシコの事例を検証したFernández and Rampal（2008），Washington Valdez（2006），またグアテマラの状況報告であるAmnesty International（2005）がある。

ることによって，女性に対する暴力が，メキシコを含めたラテンアメリカ全体に共通する社会文化的土壌に起源を有していることを明らかにしていく。

## 国境の町と女性殺人

アメリカ，テキサス州エル・パソ市と国境のリオ・グランデ川を挟んで接する，130万の人口を抱えるメキシコ有数の都市であるフアレス市（Ciudad de Juárez）は，異なった経済水準を持つふたつの社会の狭間に位置することによって，莫大な富が生み出されている場所である。メキシコの安価な労働力を利用できることに加え，アメリカという，電器，衣料品など製品の大消費地であると同時に，それらの部品や素材の製造が行われ，また工場運営のノウハウを持ったエンジニアや経営者たちが属する大国から至近距離に位置することで，フアレス市郊外にはアメリカや日本を始めとする先進国の企業の組み立て工場が多数進出している。フアレス市は，こうした世界の工場という顔を持つ一方，中南米，メキシコで生産されるコカインやヘロイン，大麻などを，最大の麻薬消費国であるアメリカへ違法に搬入するための戦略上，最も重要な地点でもある。そこは，コロンビアやメキシコのカルテルと総称される数々の麻薬組織が，その取引から得られる莫大な利益をめぐって抗争を繰り広げる場でもある。先進国の企業が，国境を越えることで発展途上国の労働力を利用し富を生み出しているのと同様に，カルテルもまた，国境を越えて麻薬を供給することで莫大な富を手にしている。

これらの麻薬組織間の抗争による治安の悪化により，世界で最も危険な都市という汚名を着せられてきたフアレス市の悪名をさらに高めているのが，90年代から今日にいたるまで繰り返し起こっている「女性殺し」の犠牲者の数とその手口の残忍さである[2)]。90年代初頭から今日にいたるまで報告されている500人を超える犠牲者たちのうちの少なからぬ数が，性的暴行を加えられた後殺害されたとされている。その中には，後ろ手に縛られ，性器の切除や頭部，手足の切断など，私たちの目には常軌を逸していると映る損壊が加えられている遺体も数多くある。これらの事件は，そこに窺える顕著な残虐性，それも女性性に対するある種の嫌悪に基づく残虐性によって，単なる殺人事件として捉えられるものではなく，女性に対する暴力の最も恐るべき事例として考察されるべきであると考えられている[3)]。

被害者の身体的特徴にもまた，共通点が見られる。犠牲者の遺体の中には損壊の度合いが甚だしいもの，腐乱化，白骨化したものも含まれているので，必ずしも生存時の身体的特徴が全て明らかになっている訳ではないが，確認されている範囲では，彼女達の多くは10代から20代前半の年齢層に属しており，小柄で華奢，黒髪の浅黒い肌をした女性達，つまりmuchachas del sur（文字通り訳すならば南＝国境の南＝メキシコ南部出身の若い女性たち）である。私たちの常識からすれば奇妙なことであるが，マスメディアを通じてこう

2）フアレス市の危険度に関しては，メキシコのNPO法人であるEl Consejo Ciudadano para la Seguridad Pública y la Justicia Penal によってまとめられた資料を参照した。
http://editor.pbsiar.com/upload/PDF/50_ciud_mas_violentas.pdf
http://www.seguridadjusticiaypaz.org.mx/sala-de-prensa/541-san-pedro-sula-la-ciudad-mas-violenta-del-mundo-juarez-la-segunda

3）アムネスティ・インターナショナルの報告Mexico: Intolerable Killings : 10 years of Abductions and Murders of Women in Ciudad Juárez and Chihuahua: Summary Report and Appeals Cases. (http://www.amnesty.org/en/library/info/AMR41/027/2003)によれば，1993年から2003年までに370人の犠牲者が確認され，少なくともそのうちの137人が殺害される前に性的暴行を受けていたとされる。また，Washington Valdez（2006）は，1993年から2005年までの犠牲者の数は455人に上るとしている。

した事件の詳細が伝えられるにも拘わらず，殺害された犠牲者たちの数，また生死がわからない行方不明者の人数は確定していない。メキシコ検事局やアムネスティ・インターナショナルをはじめ，それぞれのデータが異なった数を指し示しているのである。同様にその犯人像に関しても，連続殺人犯の犯行，悪魔崇拝カルト集団の儀式，スナッフフィルム（殺人実写映画）制作，臓器売買目的等，様々な噂や都市伝説が飛び交っている状態である（Gaspar de Alba 2010）。

女性殺しをめぐる噂の多くは憶測の域を出ないものであるが，その中にはこの国境の町で多発する凄惨な事件の社会的要因を示唆していると考えられるものもある。それは，殺害された女性たちは被害者であるにも拘わらず，度々嘲りを込めてマキロカス（maquilocas）と呼ばれているという事実である。この造語の成り立ちから，私たちは，フアレス市における女性殺しという忌わしい犯罪の背景にある社会的文脈に目を向けることになる。maqui とは，メキシコと米国との国境沿いに伸びる保税加工制度が適用される地区やそこにある組み立て加工工場の総称である「マキラドーラ」から，また locas は，正気でない，頭がおかしい，無分別な女，を表す名詞が元となっており，こうした工場で働く女性たちの二重生活，つまり工場での労働を隠れ蓑として「国境地域にやって来る売春を行う女性たち」が含意されている[4]。

また，これまで殺害に関わったとして逮捕，起訴され，服役をした者たちの捜査でも，取り調べの過程での拷問や脅迫，利益誘導があったことが明らかになっており，警察，検事局による発表の信憑性に疑問が投げかけられている。この捜査の信頼性にまつわる問題や，そもそも被害者の家族や友人たちからの訴えを受理しない，あるいは受理しても捜査に着手しないという当局の姿勢，また，女性に対する犯罪を犯した者たちが逮捕されても証拠不十分で放免されたりして，犯罪者に対する処罰が正当に行われないという事態は，被害者の家族や親族が犯人の報復を恐れて当局に訴えることさえできないという状況を生み出している[5]。こうした現状はラテンアメリカやメキシコにおける女性を取り巻く社会文化的文脈と深く関わっている。女性への暴力の許容という問題は，それを処罰する制度を運用したり立法を行う政府，警察や裁判所といった行政，司法機関に携わる人々の認識にのみ帰すべきものではなく，広く一般の人々の間に存在する社会文化的な文脈をその土壌としている。

以下では，マキラドーラと呼ばれる保税加工地区の創設から，カナダ，アメリカ，メキシコによる北米貿易自由協定の締結までのメキシコ北部国境地域での社会の変容を概観することによって，「女性殺し」と1960年代以降の政治経済的環境の変化との関連を見る。次いで，マスコミにおける論調と，ジェンダー，家族に関わるテーマを取り上げたテレビドラマを分析することによって，ラテンアメリカ，メキシコでの「ありうべき」女性像がどのようなものであるのかを明らかにし，こうした社会文化的な下支えこそが「女性殺し」の背後に潜んでいることを示していく。

4）彼女ら女性労働者に対するフアレス市の住民の反応に関しては，Balderas Domínguez（2002）を参照のこと。また，犠牲者のすべてがこの関税免除特区にあるアメリカ，ヨーロッパ，日本企業の工場で働く労働者であるわけではない。

5）捜査当局に対する信頼性の問題に関しては，Comisión Especial para Conocer y dar Seguimiento a las Investigaciones Relacionadas con los Feminicidios en la República Mexicana y a la Procuración de Justicia Vinculada による“Balance Ciudadano y Propuestas para Combatir el Feminicidio en Ciudad Juárez y Chihuahua”（2004）を参照。

**マキラドーラ，NAFTA，女性イメージ**

フアレス市で「女性殺し」が報告され始めたのは，アメリカ，カナダ，メキシコの間で北米貿易自由協定（NAFTA）が合意に至った1993年であった。翌年にこれが発効すると，メキシコへの外国直接投資額はそれ以前に較べて２倍以上上昇し，米墨国境地帯には，そのアメリカへの近接性から，多くの資金が流れ込むことになった。特に西部国境地帯には直接投資へのインセンティブを高める要素が多く，その結果，フアレス市地区の工場と雇用者の数は飛躍的に増加する（Coubès 2003）。2000年にはフアレス市のあるチワワ州の保税工場（マキラドーラ）での雇用者数は国境地域６州全体の３分の１に当たるほぼ32万人に達した（Turner Barragán 2006）。こうしたメキシコを取り巻く政治経済的な変化と，女性への執拗な攻撃性を帯びた殺人事件が同時期に発生し始めたのは単なる偶然の一致ではない。それは，この経済協定によって国境地域，そしてメキシコ社会全体に，投資の増大や雇用状況の改善といった経済の分野における効果だけでなく，ジェンダーや人種に関わる社会文化的なインパクトがもたらされたからである。

北米貿易自由協定の起源は1930年代にまで遡ることができる。19世紀半ばの隣国アメリカとの戦争と20世紀初頭のメキシコ革命による不安定な国内状態の影響で，メキシコが近代国家として機能し始めるには1920年代まで待たねばならなかった。しかしこの時期になっても，広大な面積を持ち，国家の中枢をなす地域から遠い北部国境地帯はメキシコの辺境のままであった。1930年代に入って中央政府がこの国境地域の経済活性化を図るために行ったのが，自由貿易地区の創設であった。これにより，太平洋側のティフアナやエンセナーダを皮切りとして，カリフォルニア半島全域が輸入関税撤廃地域とされ，商業活動が活気づくことになった。しかしながら，そこに製造業が興ることはなかったのである。

1960年には，PRONAF（Programa Nacional Fronteriza）と呼ばれる，北部国境地域における製造業の発展とそれにより生産される製品の販売拡張，そしてこの地域のアメリカ経済の影響の軽減とメキシコの他の地域との経済的統合を目的とした国境地域経済活性化計画が始動する。この計画を基礎として1965年に開始されたのが，BIP（Border Industrialization Program/Programa de Industrialización Fronteriza）国境地帯工業化計画である。これは，第二次大戦中の1942年に始められた，一般にブラセロ・プログラムと呼ばれるものと関わっている。ブラセロ・プログラムとは，戦争によって不足したアメリカの農業における男性労働力をメキシコからの短期契約労働によって代替することを目的に，両国間で合意された法的手続きの総体を指す。

アメリカの農業労働者組合の圧力によりこのブラセロ・プログラムの更新がなされなかったことで，その法的効力が1964年に停止すると，この両国間合意によってアメリカで職を得ていた労働者たちはメキシコに帰還せざるを得なくなる。しかしその多くは自らの出身地に戻らず，メキシコ側の国境地帯に留まることを選択したので，この地域の失業率が大幅に上昇することとなった。こうした問題を受けて，政府は新たな雇用を創出すべく，北部国境地帯での外資系資本による工場の建設に許可を与える。この原材料の輸入の非課税と輸出用製品の生産とがセットになった保税産業制度は，既に香港，台湾，マレーシア，シンガポール，フィリピンで実施されていた。メキシコの保税産業は，この先進国の人件費高騰への対応策としてアジアで行われていた，

国際生産共有策である輸出加工地区制度をモデルとして，主にアメリカ企業を対象として計画された。しかし，そこで雇用された労働力の圧倒的多数は女性であり，メキシコ政府が目論んでいた男性労働者の失業という問題は解決されぬままになる。また，国境地域のアメリカ経済の影響下からの独立と，メキシコ主要地域経済への統合というもうひとつの目的も，アメリカ経済との結びつきを強化するという逆の方向に作用する結果となった（Hansen 2003）。

今日マキラドーラとして知られている，この保税産業制度適用地域に建設された工場（これもまたマキラドーラと呼ばれる）での単純な組み立て作業に従事する労働者の圧倒的多数が女性であることは，メキシコに先立って輸出加工地区で工場が稼働していた東アジアでの経験に起源を持つ[6]。そこで経営者たちは，工場を円滑に効率よく稼働させるためには女性の労働者が適していると判断する。女性たち，それも年若い女性たちは，男性に較べて従順で命令に従わせやすいゆえ労働訓練し易く，組合活動や争議にも関わることが少ないと見なされたのである。また小さな手と指を持ち器用であるがゆえに，細かな部品からなる家庭電気製品，自動車電装関連部品の組み立てや衣類の裁縫に適しているとも考えられていた（Salzinger 2003）。このように，メキシコでこの制度が稼働し始める以前から，既にそこで雇用される労働者の像は，多分に「女性」性に関わるステレオタイプに基づいて確立されていたのである。

メキシコで保税産業制度が開始された当初，地域内で投資する側にとって最も魅力的に映ったのは，アクセスの容易さやインフラの充実度から，アメリカのエルパソ市の至近距離に位置する双子都市フアレス市であった（Hansen 2003:13）。当時，伝統的な国境産業であった飲食業（酒場）と接客業（売春）に依存していたフアレス市にとっても，こうした真っ当で世間からの尊敬に値する産業の進出は歓迎すべきものであった。そうした中で受け入れ側が懸念していたのは，工場での職を求めてやって来るであろう女性たちの「性」に関わる問題であった。資本家たちが東アジアでの工場稼働経験から得たとされる，女性の男性に対する優位性という神話に基づく女性労働力への依存傾向は，当初からフアレス市のエリートたちによって，メキシコの伝統的な家庭や家父長制的社会構造への脅威という観点から懸念が表明されていたのである。

マキラドーラが稼働を開始してからも，フアレス市の地元紙に1971年に掲載された記事からは，この新しい地域産業に対する相反する感情が読み取れる。そこでは，東アジアの女性工に比肩する，メキシコ女性工の能力が称揚され，売春産業への歯止めとしてマキラドーラへの期待が表明されている一方，シングルマザーの増加や，工場ができるまでは貧しい女性たちの主な働き口であった家事労働に従事する者の不足が嘆かれている。70年代暮には，前述のブラセロ・プログラム（戦時下アメリカの男性労働力不足をメキシコ人労働力で補う計画）が撤回され母国へ帰還したメキシコ人男性労働者たちの雇用が進まない状況下，伝統的メキシコの家族像の中核であった「稼ぎ手としての男性」の権威を失墜させたものとしてマキラドーラを糾弾する記事がメキシコの全国紙に掲載される。80年代にはアメリカ経済の低迷とメキシコ通貨危機により，レイオフや実質賃金の下落，労働条件の

6）マキラドーラ産業における男女の労働者の比率は都市によって異なる。フアレス市のマキラドーラでは，男性労働者の割合が2000年に25％と，他の都市に較べて最も高い数値を示している（Coubè 2003:20）。

悪化が始まる。これに伴って労使間の紛争が頻発し，従順な女性労働者というイメージが崩れ始めると，マスメディアは劣悪な労働環境や低賃金といった企業側の非を等閑視し，工場で働く女性たちの飲酒，自由恋愛，離婚，婚外子等，伝統的な社会規範からの逸脱行為を批判するようになる。さらに，徒党（ギャング）を組んでの暴力や売春行為等，憶測に基づいて書かれていると思しき記事で，彼女らを糾弾する論調は更に強まることとなった(Salzinger 2003:Ch.3)。

マスコミにおける批判の矛先は時として，妻の収入に依存し，男としての価値を失っている，職のない男たちにも向けられているが，彼らの職を奪っているのが，家庭内労働や伝統的価値観から解放され売春等ふしだらな行為を行う（と確信されている）働く若い女性たちであるがゆえ，彼女たちはより激しく攻撃されることとなる。こうした国境地帯のマキラドーラをめぐるマスメディアの言説から，私たちはふたつの異なった，しかし互いに一枚のコインの表裏を成すような関係にある，女性に関する表象を看取することができる。ひとつめの女性表象は，国境地帯にマキラドーラが進出する以前から企業，工場の経営者たちの間で共有されていた，女性は従順で献身的，器用であるといったステレオタイプ，そしてフアレス市のエリートや新聞によって唱えられた，家庭内にいるべき存在としての女性像とで構成されている。もうひとつは，家庭を出て働く女性たちに付与されている，無軌道で奔放，道徳的に誤った道を歩むふしだらな女性というイメージである。

このふたつのタイプの女性表象は，植民地期初期に先スペイン期宗教の聖地に出現したとされる，現在のメキシコの守護聖人である褐色の聖母グアダルーペと，16世紀にアステカ征服の指揮を執ったエルナン・コルテスの通訳であり愛人でもあったマリンチェ（Malintzin）という，メキシコのナショナリズムを語る上で常に対照的な価値を象徴してきた存在にその源泉を持っている。メキシコ（メソアメリカ）土着の地母神とカトリックの聖母伝説の融合としてのグアダルーペが，メキシコの歴史の中で独立や革命のシンボルとして人々の統合と解放を体現する存在であり続けてきたのに対して，コルテスとの間に数人の子をもうけたマリンチェは，ヨーロッパ人と先住民の間の混血民族（メスティーソ＝メキシコ人）誕生の事実上の母であり象徴であるにも拘わらず，ヨーロッパ人に媚びた裏切り者という負の価値を付与されてきた。この聖母／売女という対比で語られてきた，ネーション（祖国，民族）誕生のふたつのシンボルは同時に，貞淑で自己犠牲的な女性とふしだらな女性という理念形として女性の行動規範を形づくり，ネーションを維持してきた男性中心の家族制度，家父長制を支えるモラル・コードとしても機能してきたのである。

実際の人間女性を善悪の二極へと単純類型化したこの対比は，マリアニスモと称される，ラテンアメリカで独自の発展を遂げた半神格化された理想的女性像と深く関わっている。

このマリアニスモは，カトリック信仰における聖母マリア崇拝に起源を持ち，女性の男性に対する精神的道徳的な優位性を強調する。その一方，女性は徳の高さゆえに，自己犠牲，献身の精神から，社会や家庭における従属的な地位を甘んじて受け入れ，神からの授かり物である子供を胎内に宿すことで，人間もその一部である自然界（俗）と神の領域である超自然界（聖）との橋渡しとなる存在でもある，とされる。こうした社会の理想像の影響の下，女性たちはそれを内面化し，自らの意志で自己犠牲的行為を行い，男性への従属を耐え忍ぶことで，精神的に崇高な存在となろ

うとする傾向を示す。しかし，男性にとっての女性像はこうした貞節なそれに留まらない。これを家父長制の権威を掌握してきたメキシコ男性の側から見るならば，女性とは聖母の如く彼らに慰藉を与えてくれる存在である一方，妻あるいは愛人として彼らの性的願望を満たしてくれる，奔放に振る舞う生き物でもあることになる[7]。この忍従する女性像と，一見その対極にあるように思われるふしだらな女性像は，宗教社会的に形成されたひとつのイデオロギーの持つふたつの側面であるのだ。

このように，一見相反する女性像は，ジェンダー間の不均衡な力関係を維持するために作り出された社会規範の一部をなしている。マキラドーラをめぐるマスコミの論調には，このジェンダーの位階制に基づく女性批判と並んで，もうひとつメキシコというネーションの成立と維持に関わる社会規範が見て取れる。人種のイデオロギー，つまりヨーロッパ系は先住民系に対し生物学的優位性を有するがゆえ，社会的にも優位であるという人種の位階制が，現状の社会秩序を維持するためのもうひとつの暗黙の前提となっているのである。南部からの女性たちが，トルティージャ（トウモロコシから作られる主食のパン）作りやベッドメーキングといった彼女らの本分をおろそかにして，地元の（つまり北部の）女性たちの場所であるこの地にやって来ていると非難する論調は，先スペイン期文化に起源を持つ主食トルティージャと南部の女性を結びつけることで，また彼女たちの本分を家庭内での労働と規定することで，南部から仕事を求めてやって来た女性たちの先住民性，そして伝統的な父権社会における彼女たちの従属的役割を強調している。別の言い方をするならば，マスコミが擁護する北部出身の女性たちは，アステカ，マヤをはじめとする古代社会の中心地から遠く離れた，ヨーロッパ移民によって形成された社会環境に生を享けており，南部の女性たちとは人種的，社会的に異なった存在であるがゆえ，先住民系女性たちが賃労働として担うべき家庭労働から免除されている存在であることが暗に示されているともいえる。

### テレビドラマと社会の理想型

私たちが上で見た，マキラドーラをめぐる新聞報道の論調の背後にある，メキシコ社会に根付いているジェンダー・イデオロギー，人種イデオロギーというものの存在は，ラテンアメリカのマスメディアの中で最も多くの人々の耳目に触れるテレビという媒体においても，容易に看取することができる。その中で常に高い視聴率を誇るテレノベラと呼ばれるラテンアメリカ産連続テレビ小説の制作本数は，1950年代末に誕生してから50余年経った今日，900を数えるに至ったとされる[8]。これらのテレビドラマは，その製作国，地域によって異なった特徴を有していることが指摘されてきた（López 1995, Mazziotti 2006）。メキシコ製作のテレノベラでは，特定の社会的文脈との関わりを明確にしない設定の中で，善悪二元化された登場人物たちの，すれ違い，偶然の出会いといったメロドラマ的仕掛けを通して，恋愛の成就，社会階梯の上昇，家族の和解など，社会のリアリティーからは遊離した物語が描かれてきた。現実に生起している社会病理に関わるテーマが避けられてきた背景には，2000年に政権の座から降りることになるまで70余年にわたって権力を保持してきた制度的革命党（PRI）政権と，国民の 9

7）メキシコの人類学者バルトラは，こうした女性像をChingadalupeという，暴力的に犯された女性を意味するchingadaと聖母Guadalupeの名前を組み合わせた造語で表している（Bartra 1987）。
8）2005年の前半期までに，872本のドラマが製作された（Cueva 2005）。

割以上が帰依し，とりわけテレビを最大の娯楽とする低所得者層の人々の間で支持が高いカトリック教会の意向が強く反映していたと言われる[9]。

しかし，ドラマ制作におけるこうした伝統は近年になって大きな転換点を迎える。現実逃避の代名詞として揶揄されてきたこのジャンルに，社会と政治に関わるテーマが登場し始めたのである。こうした変化は2007年に行われた政党法，選挙法の改正と時を同じくしている。改正以前には自由であった，テレビ，ラジオのコマーシャルを通じての政党の宣伝，選挙活動が禁止されたことによって，各政党はこれらの活動の場を法による規制が存在しないドラマ番組自体の中に求めたのである。

この昨今のテレノベラが描く物語におこりつつある変容，つまり，現実から遊離したものとされてきたジャンルへの現実的な要素の侵入という変化は，コマーシャル枠と番組枠との間の境界線の不明瞭化という，番組の形態的側面に関わるものでもある。これまでは番組の間に挿入されるコマーシャル枠内で行われていた政党の広報活動が，実在の政党名や地名，公約やマニフェストを物語の台詞の中に織り込んだりプロットの一部として使用することで行われるようになったのと同様に，番組のスポンサー企業やその製品のマーケティング活動がコマーシャル枠を越え，ドラマ内に侵入し始めているのである[10]。ミザンセーヌ（mise en scène）の中で，製品がその商標を隠すことなく使用されること，ドラマ内の登場人物たちが製品名を台詞の一部として発話すること，また企業名や商品名がプロットの一部として物語の筋の中で不可欠なものとされることも，例外的なケースではなくなってきた[11]。

近年までは現実から程遠い世界を描いてきたテレノベラであったが，大衆レベルで高い人気を有していることで，本来の目的である娯楽以外の役割を担わされることもあった。創設時から政権と非常に密接な関係を有してきたテレビ局テレビサは，政権の意向を受けて，1970年代から80年代にかけて社会改良キャンペーンをテレノベラを通じて行っている。そこでは，家族計画，識字教育，社会の基盤としての家族の価値などが取り上げられ，計画的な家庭経営や教育水準の上昇，社会モラル改善を目的とした啓蒙的な内容のテレビドラマが放送された。こうした，政権の肝煎りによって導入された，大衆の啓蒙を目的としたテーマは，サブプロットとして物語の背景に設定されたり，また登場人物達の会話の中で言及されたりした。しかしながら，それらは当時の社会の中で事件性を持ったテーマではなく，政権の方針としての社会改良計画に

9）21世紀に入る前にこうした伝統を破ったのは，テレビ創成期から唯一の民放チャンネルとして君臨してきたテレビサの独占状態に終止符を打ったアステカTVの製作になる「私怨にあらず」Nada personal (1996) であった。そこでは，メキシコという特定の社会文脈が明示され，政治と組織犯罪の癒着という社会病理が物語のテーマであった。

10）そうした例のひとつが，高い視聴率を誇った，テレビサ製作のテレノベラ「アグリー・ベティー」La fea más bella (2006) である。2006年の大統領選挙の選挙活動期間が終了する日の放送分で，ひとりの登場人物に，実在する特定の候補者に投票するべきだという台詞が割り当てられていた。そこでは，当時国民行動党 (PAN) の候補者で，その後大統領選に勝利するフェリペ・カルデロンが選挙活動で自らを称して使っていたel Presidente del empleo「雇用を生み出す大統領」という言葉が使われていたのだが，それが誰のことを指すのかは明らかであり，その後論議を引き起こすこととなった。また，メキシコ各地の州政府は，自州におけるテレノベラの撮影に協力することで，自州のプロモーションをドラマを通じて行っている。例えば，中部のイダルゴ州は，制作局であるテレビサとの間で，「女主人」Soy tu dueña (2011) の撮影に必要な経費（撮影隊や俳優の移動と宿泊，私有地使用の場合の費用）を負担することで，州の名勝地の紹介だけでなく，州政府が行っている様々な成果や業績，そして知事をはじめとする州政府の高官達の名前をドラマの最後にテロップで入れる契約を取り交わしている。

11）「愛の精」Destilando amor (2007) におけるテキーラメーカーのサウサ，「金の切れ目が縁の切れ目」Hasta que el dinero nos separe (2010) での自動車メーカーのフォード，そして「幸運の家族」Una familia con suerteでの化粧品のエイボンなどの例が挙げられる。

沿ったものであった。ドラマの目指すところは，ニュースやドキュメンタリーのように視聴者を取り巻く社会で生起する出来事を彼らに事実として伝達し，社会の問題として目を向けさせることではなく，あくまでもドラマの登場人物たちの個人的な問題として視聴者の意識に滑り込ませることにあったのだ。ドラマ内で取り上げられるこれらのテーマは，登場人物と視聴者との閉じた関係の中でのみ理解，解決されることになり，現実の社会の中に根を持つ問題として捉えられることはないのである。

テレビサは2007年にも，こうした娯楽のためだけでない，社会的意義を持った番組制作を継続していく旨を表明している。こうした方針の表れとして，乳癌，子宮頸癌予防啓発，ストリートチルドレンの養子縁組促進，自然環境保護など，現今の社会と関わるテーマから，女性の美しさの所在という，女性の容貌偏重主義に一石を投じるテーマまでが，個々の登場人物の個人的な問題として，あるいは台詞の中で取り上げられることとなった[12)]。これらのテーマは，番組のスポンサーである企業のイメージ戦略や政府関連機関が推進するプロジェクトとの兼ね合いで決定されていると考えられる。しかし，こうした視聴者への社会的メッセージは時として社会啓発や教訓の枠を越え，人々の議論の的となっている時事的な問題，法によって認められている市民，国民としての権利の領域にまで及び始めている。

その一例が，テレビサ制作の「イエロ家の掟」Alma de Hierro（2008）である。そこでは，メキシコ市（メキシコ連邦区）議会でそれぞれ2006年と2007年に可決された，中絶を合法とする法律（Ley de Interrupción Legal del Embarazo）と，婚姻関係にないカップル（同性，異性を問わず）にも夫婦と同等の権利を認める共生パートナーシップ法（Ley de Sociedad de Convivencia）に関わるテーマが取り上げられた。ドラマの主人公は，メキシコ映画黄金時代から度々描写されてきた，権威主義的だが初心な男性である。また，ニュースの直前という，テレノベラ・ジャンルでは前例のない時間枠で放送されている。従来このジャンルが維持してきた，女性主人公というパターンや時間枠を破っていることは，社会で議論の的となっているこれらのテーマに積極的に関与しようとするこのドラマの意図を示唆しているように思われる。ドラマの中では，主人公の娘と実の父親をめぐるエピソードが，前述の法律の成立によって可能となった中絶とシビルユニオンという市民的権利に関わってくることになる。

ソーセージ製造小売業を営むイエロ家の長女は，従業員である妻子ある男性への恋慕抑え難く彼と関係を持ち，その結果妊娠してしまう。彼女は子供の父親である男性の家庭を壊すまいと，彼には妊娠を告げることなく，中絶という手段に訴えることを決心する。しかし，今や合法であるこの医療的行為が施されんとする時に彼女は後悔し，子供を産むことを選択することになる。彼女が妊娠を知った当初に下した，「父親を欠いた家族」像に耐えられないがゆえの選択肢であった中絶という判断は，「生まれくる生命への尊重」ゆえに覆される。物語の重点が，中絶という行為の合法性やそれが女性の権利であるということにではなく，生まれてくる権利，生命の尊重におかれていることは明らかである。主

12）その例としては，コロンビアRCN製作になる「アグリー・ベティー」Yo soy Betty, la feaをリメークしたLa fea más bella (2007) と「愛に満たされて」Llena de amor (2010) とが挙げられる。前者は，容姿に恵まれない若い女性が公私ともに幸せになっていく成功物語を通して，また後者は，肥満体型の女性主人公が理想的な愛を成就させることで，美というものが外面的なものによってのみ作られるものではないという教訓を視聴者に示している。

人公の長女の体験という個人的な窓を通して，視聴者は中絶という行為を見ることとなる。その結果，視聴者は彼女の葛藤の軌跡を辿って，シングルマザーが望ましい家族の形態ではないこと，しかしそれにも拘わらず，生命こそが最も尊重さるべきものであることに思い到ることになるのだ。同様に，主人公の父親を中心に展開する，シビルユニオン法をめぐるエピソードにおいてもまた，視聴者の耳目は同性カップルの形成が市民の権利であるということにではなく，同性愛者が社会的に経験するであろう様々な困難へとひきつけられる。主人公が子供の頃，家族を捨てて愛人である男性を選んだこの父親は，物語の最後で彼の愛人と法的な権利を有するパートナー関係を形成することになるのだが，ドラマをここまで続けて見てきた人々は，この幸せな結末を，市民としての同性愛者が付与されている当然の権利としてではなく，この父親がここに到るまでに経験してきた社会の偏見とそれに伴う家族への不名誉という障害を乗り越えた末の報いとして捉えるであろう。つまり，社会文化的な抑圧の構造により，彼が自らの性的嗜好を隠蔽せざるを得なかった経緯により強く印象づけられるのである。

テレビ創成期から，政権，そしてカトリック教会との密接な関係の中でテレビサ局によって制作されてきた，現実から遊離したドラマの数々が，常に善良な女性主人公と悪辣なアンチ・ヒロインという図式によって構成されてきたのは偶然ではない。そこに私たちが見ることができるのは，マリアニスモやグアダルーペ／マリンチェの二極化された女性像の反映であり，善良なヒロインが，アンチ・ヒロインによってもたらされる様々な困難を耐え忍ぶことによってその徳の高さを証明するのもまた，このマリアニスモが説く自己犠牲の精神と切り離して考えることはできない。ヒロインは，この困難の経験を耐えた報酬として道徳的優位性を獲得することになり，物質的充足，恋愛成就という，人間俗社会における成功を与えられてきたのである。

こうした観点から見るならば，テレビドラマの近年の変容というものは，その形態面における市場主義の尖鋭化と，社会的なテーマの導入にも拘わらず，旧態依然のメッセージを発し続けていることがわかるであろう。伝統的なメキシコ・テレビドラマは，カトリックの聖母信仰に起源を持つ自己犠牲的精神が報いられることを描くことによって，女性の社会における従属的地位を自然化し，理想的家族像，女性像の素描を視聴者に提示してきた。一方，前述のテレビドラマの制作意図も，メキシコ市で可決されたふたつの法案をめぐって当時の社会に巻き起こっていた議論を考慮するならば，明らかになるであろう。中絶とシビルユニオンの権利は，カトリック教会と2000年から国政レベルでの与党である保守右寄りのPAN（国民行動党）による強い反対にも拘わらず，メキシコ市の政権を90年代から握っている左翼のPRD（民主革命党）によって法制化された。これに対してPAN（国民行動党）は，これらの法律が憲法違反であると，新たに国家最高司法裁判所に訴えを起こしていたのであった。このテレビドラマでは，カトリック教会の公式見解である保守的な生命観と家族形態に背馳する行為を行う人物が直面するであろう社会的な困難や差別を描くことで，より具体的に女性が行ってはならないこと，あってはならない家族の形態を提示していると言えよう。この例は，ここ数年の間にこのテレノベラという媒体が，政治的経済的コントロールを握る層のイデオロギー媒体としての機能をより明確にし始めたことを示すものだと考えられるのである（Orozco 2011）。

**ミソジニーとネーション**

前述のドラマは決して声高に中絶や同性のシビルユニオンを糾弾してはいない。ただ視聴者に，市民の権利を行使する人物が経験することになるであろう，彼／彼女を取り巻く人物や集団の反応を具体的に示しているだけである。しかし，そこから受け取ることができるのは，保守的で現状を肯定するようなメッセージなのである。こうした，直接的にメッセージを主張するのではなく，ほのめかし，受け取る側の解釈に委ねるような手法は決して目新しいものではない[13)]。テレビドラマのメーッセージは，ニュースやドキュメンタリーのように，問題の所在や原因，社会としてのそれらへの対処といった論理的な思考へと導くことを（たとえそれが表面的なものであるにせよ）目的とするのではない。それは見る者の情動に訴えるものであるがゆえに，そうしたメッセージは人々の感情的な側面と共振することになる。別の言い方をするならば，ニュースやドキュメンタリーが，そこで取り上げる出来事への取り組みを人々の公共的社会的なレベルにおいて要請するのに対して，テレノベラは，同じ出来事を彼らの個人的な側面へと追いやってしまう。つまり，人々の間にある問題を社会システムの構造自体に由来する必然的な社会病理としてではなく，もしこうしたことが自分の身に起こったらどうするかという，個人の上に偶然降りかかる運命的な出来事として捉えさせてしまうのである。

フアレス市の女性殺しにおいて共通する犯行の手口（modus operandi）のひとつは，遺体を不特定多数の人が見える場所に意図的に放置するという行為である。そこには，地方国家当局，人権活動家，ジャーナリスト，さらには犠牲者の男性家族や友人，そして恐らくは闇の経済を動かしている他のライバル・グループに対する力の誇示があると考えられる。ここから垣間見えるのは，男性至上主義に特有の力の政治とジェンダーにまつわる神話，ファンタジー（gender imaginary）である。男性至上主義が支配する集団で男らしさを証明するために必要とされるのが，貢物（象徴的であれ，具体的な物であれ）を別の，男性性を必要としない集団（すなわち女性）から，説得と合意によって，あるいは強制的な手段によって獲得することである。その貢物とは女性の身体であり，女性が象徴する再生産機能である。フアレス市の女性殺しには，男性の優位性に楯突こうとする女性たち，つまりいみじくもフアレス市の地元紙が報じたように，「稼ぎ手としての男性の権威を失墜させた」女性工場労働者たちに対する懲罰という意味が読み取れる。メキシコ南部出身者に顕著な，小柄で浅黒い肌という身体的特徴を持った女性たちが犠牲となるのもまた，偶

13）グアテマラ内戦時代，特に1978年から84年にかけて，軍事政権は反政府組織の壊滅を目的として対反乱作戦（治安戦）を強化する。この作戦では，武力による反政府活動の抑え込みが多くの一般市民をも含む20万人とも言われる犠牲者を生み出した。この武力弾圧と平行して行われ，反乱活動の抑止に一役買っていたのが，マスコミを通じてのプロパガンダであった。当時毎日のように新聞で報道されていたのは，軍によって殺害された犠牲者集団のニュースではなく，その多くが政府に批判的な人物であったと思われる，個々に殺害された身元不明の人々に関するそれであった。それらの報道には，犠牲者の発見場所とその遺体に残された暴力や拷問の痕跡のレポート，そして被害者の衣類や着衣の乱れに関する詳細が記されている一方，殺害に関与したと考えられる人物像の記述や，被害者への暴力の原因に関する説明は一切見られない。そこでは，マスコミ報道を通じて示される身元不明の被害者の遺体自体が，読者によって読み解かれるテキストとなり，人々の間に恐怖を蔓延させていたのである。この一見客観的な記述は，被害者の身元，殺人の犯人と原因への言及を欠いていることによって，読者たちに自分たちも被害者になるかもしれないという漠然とした不安を引き起こす。同時に，日常生活に密着した衣類に関わる記述が，そうした不安が現実に起こりうるものであるという確信を生じさせることになる。また，どんな行動が殺人という暴力を誘発するのかという基準が示されないので，不安に駆られた人々はそうした行動を拡大解釈することになり，その結果，日常の社会生活の規制，ひいては反政府活動への関与の抑止という効果が生まれるのである（Torres 2005）。

然ではない。そこには，生物学的，社会的に劣っていると考えられている先住民系の女性たちの，北部メキシコ，つまりヨーロッパ系住民が多い土地での傍若無人な振る舞いに対する懲罰という側面も看取できる[14]。

この男性が女性から収奪する構造を支えてきたのが家父長制という社会制度であり，この制度を維持するために必要であったのが「想像された女性イメージ」からの逸脱行為を規制するメカニズムであった。聖母マリア崇拝に起源を持つマリアニスモに代表される，女性の模範的行動を規定する総体は，私たちが上で見てきたように，企業家による工場労働者の選定やマスコミ報道，テレビドラマを通して再生産されている。しかしながら，女性労働者に対するいわれなき中傷や，法的に認められている権利の行使を差し控えさせるようなメッセージの背後にあるのは，マスメディアや宗教，政治の権力を握っている一部のエリートたちだけの意向ではないことを知る必要がある。少なからぬ数の市井の人々もまた，こうした保守的，反動的とも受け取れる社会の傾向を容認，もしくは後押ししていることは，メキシコ市で成立した前述の中絶法が国家最高司法裁判所によって合憲とされた直後に，反中絶法である「受胎初期の生命保護法」（la protección a la vida desde el momento de la concepción）が，メキシコの32州中17州で成立していることを見れば明らかであろう。

メキシコ北部国境地域における女性殺人の背後には，イベリア文化の伝統をうけ植民地時代に形成された理想的女性像，そしてそこからの逸脱を規制する様々な言説を含む社会文化的な土壌と，近代以降顕著になってきた，経済の要請による女性の社会進出との間に横たわるディレンマが窺える。この理想的女性像を創り出したのも，そこからの逸脱を許そうとしないのも，そしてこうした女性への暴力が引き起こされるのも，その根源を辿るならば，私たちは男女間，人種間の不均衡な力関係というものに行き着くことになる。それは，植民地制度や近代国民国家メキシコの形成とも深く関わっている，家父長制，人種主義というイデオロギーの上に立てられた社会構造でもある。

14）アメリカへ密入国しようとする不法移民に対する，アメリカ入国帰化局の係員や国境警備隊員による性的暴行が起こる背景には，不法移民や麻薬密輸の増加に伴い軍事化が進む米墨国境のアメリカ側の状況があるという。この軍事化の根本にあるのが，彼我の明確な区別，つまりメキシコ＝ラテンアメリカ＝ラティーノvs. アメリカという想像された対立である。このようにして作り出される，人種的，民族的に異なった敵というイデオロギー的構築と関わってくるのが，女性の身体である。それは，女性がその再生産機能によって民族とその未来を象徴しているからに他ならない（Falcón 2001: 34)。

**【参考文献】**

Amnesty International
2005　Guatemala: no protection, no justice: killing of women in Guatemala. http://www.amnesty.org/en/library/info/AMR34/017/2005/en, 2012/4/12アクセス

Balderas Domínguez, Jorge
2002　*Mujeres, antros y estigmas en la noche juarense*. Chihuahua: Lnstituto Chihuahuense de la Cultura.

Bartra, Roger
1987　*La jaula de la melancolia: identidad y metamorfosis del mexicano*. México: Grijalbo.

Consejo Ciudadano para la Seguridad Pública y la Justicia Penal, El
2011　Estudio comparativo de la incidencia de homicidio doloso en ciudades y jurisdicciones sub-nacionales de los países del mundo 2010. http://editor.pbsiar.com/upload/PDF/50_ciud_mas_violentas.pdf, 2012/4/12アクセス
2012　San Pedro Sula, la ciudad más violenta del mundo; Juárez, la segunda. http://www.seguridadjusticiaypaz.org.mx/sala-de-prensa/541-san-pedro-sula-la-ciudad-mas-violenta-del-mundo-juarez-la-segunda,

2012/4/12アクセス
Coubês, Marie-Laure
2003 Evolución del empleo fronterizo en los noventa: efectos del TLCAN y de la devaluación sobre la estructura ocupacional. *Frontera Norte* 15(30): 7-32.
Cueva, Álvaro
2005 *Revista Álvaro Cueva Presenta*, edición especial núm.1 (septiembre).
Falcón, Sylvanna
2001 Rape as a weapon of war: Advancing human rights for women at the U.S.-Mexico border. *Social Justice* 28(2):31-50.
Fernández, Marcos and Jean-Christophe Rampal
2008 *La ciudad de las muertas: la tragedia de Ciudad Juárez*. Barcelona: Debate.
Fregoso, Rosa-Linda and Cynthia Bejarano
2010 Introduction. In *Terrorizing women: feminicide in the Américas*. Fregoso and Bejarano, eds. Pp.1-42. Durham: Duke University Press.
Gaspar de Alba, Alicia
2010 Poor brown woman: the Miller's compensation for "free" trade. *In Making a killing: femicide, free trade, and la frontera*. Gaspar de Alba, ed. Pp.63-93. Austin: University of Texas Press.
Hansen, Lawrence Douglas Taylor
2003 The origins of the Maquila industry in Mexico. *Comercio Exterior* 53(11): 1-16.
López, Ana M.
1995 Our welcomed guests: Telenoveras in Latin America. In *To Be Continued...: Soap Operas around the World*. Robert C. Allen, ed. Pp.256-275. London: Routledge.
Mazziotti, Nora
2006 *Telenovela: industria y prácticas sociales*. Bogotá: Norma.
Orozco, Guillermo
2011 Entre espectáculo, mercado y politica: la telenovela mexicana en más de cinco décadas. En *Telenovelas en México: nuestras intimas extrañas*. Pp.181-218. Mexico: Delphi.
Russell, Diana E. H., and Jill Radford
1992 *Femicide: The politics of woman killing.* New York: Twayne.
Salzinger, Leslie
2003 *Genders in production: Making workers in Mexico's global factories*. Berkeley: University of California Press.
Torres, M. Gabriela
2005 Bloody Deeds/Hechos sangrientes: Reading Guatemala's Record of Political Violence in Cadaver Reports. In *When States Kill: Latin America, the US, and Technologies of Terror*. Menjivar & Rodriguez, eds. Pp.143-169. Austin: University of Texas Press.
Turner Barragán, Ernesto
2006 Influencia de la industria maquiladora y el TLCAN en la demografia y el desarrollo económico de la frontera norte de México. *Análisis Económico* 21(46): 369-396.
Washington Valdez, Diana
2006 *The killing fields: Harvest of women: The truth about Mexico's bloody border legacy*. Los Angeles: Peace at the Border.